

## 家本政明

IEMOTO  
MASAAKI

——2021年に引退されるまで、日本を代表するサッカーのレフェリーとしてJリーグで活躍されました。なぜレフェリーを目指そうと思ったのでしょうか。

**家本さん(以下、敬称略)** 小学校3年

生からサッカーをはじめたのですが、高校1年生の部活(練習)中に体に異変を感じました。GW頃から9月頃までの期間だけ激しい運動をすると吐血するようになってしまったんです。その症状は2年生、3年生になっても治まらず、受験の時期には「サッカーとは別の道を選ばなきゃな」と考えていました。大学に進学する予定ではなかったのですが、縁あってサッカーの強豪と呼ばれる同志社大学に行くことになりました。そこでもう一度サッカーに打ち込みたいという気持ちが湧いて参加したものの症状は治まることなく、医者からは「健康的に生きたいのなら、もうサッカーはやめたほうがいい」と言われ、選手生命が終わってしまいました。同好会や学生コーチとして、サッカーに携わる、楽しむということもできましたが、それが自分に合うイメージが湧きませんでした。どうしようかなと考えているときに思い出したのが、高校時代に監督に任されたことのあるレフェリーでした。自分の性格や考えていることに合っているような気がして、いままで自分がやってきた

## レフェリーが大切にしたい選手・同僚との対話術とは

家本政明さんはサッカーJリーグ通算516試合で審判を務め、21年に引退した元プロフェッショナルレフェリー。サッカーの主審は、熱くなる選手のコントロールやミスをした同僚のカバーを試合中に即座に行わなければならない。その中で家本さんが大切にしていたコミュニケーション術について聞いた。

文=野崎 航 写真=大林 史能

選手としての経験も生きるのではないかと。当然、レフェリーは正しいジャッジやスムーズに試合を進行させることに一生懸命になるわけですが、そのチームや選手のために一生懸命に取り組むことが心地良いと感じる自分がいました。この世界なら生きていけるかなと。体調次第ではあるものの、続けられそうであればチャレンジしてみようと思えました。

——大学卒業後、京都パープルサンガ(現、京都サンガF.C.)への就職を経て、在職中に全国最年少で一級審判の資格を獲得。02年からJリーグで主審を務められました。レフェリーになりたてのころはどのように選手とコミュニケーションを図っていたのでしょうか。

**家本** 96年に一級審判の資格を取ったのですが、当時は選手と話すな、笑うな、触れるなという、厳格さを持つことが良き審判のスタイルとされています。選手と笑いながら会話したり、ミスジャッジをして謝ったりというのはタブーとされていたんです。一方で僕の性格としては、人とすぐに仲良くなりたいたいし、コミュニケーションを取りたいほうなので、厳格さを保たなければいけないこととのギャップに最初は戸惑いました。一般的な会社員と同じで、協会に属する身としてはそこに

合わせることも大切だと思っていて、選手には毅然とした態度をとっていましたが、嫌われていたかもしれない(笑)。ただそういった関係性がという時代でしたし、そのスタイルを続けて05年にはプロ契約であるスペシャルレフェリー(現、プロフェッショナルレフェリー)になりました。

——いまお話している家本さんの印象とは真逆の印象ですね。ターニングポイントとなった出来事があったのでしょうか。

**家本** ターニングポイントは08年のゼロックススーパーカップです。毎年、Jリーグのシーズン開幕前に行われる大会で、新シーズンのレフェリーの判定基準を審判団だけでなく、チームと選手にも共有する場になっています。例えるなら交通安全週間のようなもの。お巡りさんも普段は多少緩かったりしますが、交通安全週間るときだけは厳しくなるじゃないですか。それと似ていて、こちらは選手に要求する。違反したら罰金がかかっていく。厳しいし、安全の確保につながるという競技の正しさが私にはその試合で協会に、毅然としたレフェ

続きはデジタルブックで  
ご覧いただけます。

詳細はこちら▶